繪本西遊記

初編　七

へ 遊 1
2500
40-7

池清

前田先生編 小二郎一代記 三十 大尾
新説 曉天 伊藤專三編 星五郎一代記 五十 大尾
怪談 三遊亭圓朝演述 牡丹燈籠 三十
塩原 同 多助一代記 四十 大尾
業平 同 文治一代記 全
大岡 小西屋政談 十二
近世小説 河内山實録 五十 大尾
繪本 星月夜顕晦録 三十 大尾
大郷穆編 燕山外史 二冊

一御花主様方ますます御きげん能恐悦至極ニ奉存候随つて私店年来かし本渡世仕候處御かげを以て日にまし繁昌仕り右ニ付今般開化の御世に相成西洋各國の書物翻譯書繪入讀本滑稽本の部ニ至迄類品ニ至迄澤山ニ所持仕候別ねだん下直ニ相働キ候間御高覧の程相願候 御注文下され候ハゞ猶御最寄ニ御方様へ御風聴偏ニ奉希上候

月 日 誠光堂謹白

和漢書物 小説貸本所

東京京橋區弥左エ門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋 清吉

行者大閙黒風山　觀音收伏熊羆怪

孫行者觔斗雲に騰り黒風山にきたり空中より瞬と見わたせバ石崖の下に三人の妖精居ならびて物がたりす其一人ハ件の黒漢左の一人ハ道人右に座したるハ白衣秀士なり行者雲をおりて崖の陰にかくれてきくに黒漢の曰く明日ハ某が母難日なり両公を請じて一杯を酌べしとて昨夜錦襴の佛衣をぬすみ明日の酒宴を佛衣會と号し公等に見せんと行者是をきくや否や如意棒を打振り出て黒漢我が袈裟を偸み佛衣會とするとハ出もせで我ハ汝が…ぎんハ此棒忽ち你が身を粉にせんと三個の妖精是を見て大に…

黒漢
悟空
秀士
行者入レ山遭ニ三妖精

おどろき黒漢ハ風と化して逃去行道に雲にのりて走ル秀士一人
跡に残れるハ只一棒に打殺せバ白花蛇と変じたり行者是を
見るに黒漢ハかならず熊の精なるべし何所に隠るゝともさがし出して袈
裟をとりかへさんバ止まじと其山中を尋るに一座の洞あり石門の
たかさ二丈ばかり石板の上に黒風山黒風洞と書たり行者鉄棒を揚て門の
扇を打大音に罵りて曰く賊怪早く吾袈裟をかへせと喚れば黒
漢身に甲冑を着し手に一桿の黒纓鎗を提門を開きおどり出て
行者と捻合しく戦ふ事十余合の黒漢敵しかねてやありけん身
をかはして洞の中へ入り石門を扉したり行者も三蔵の待侘玉ハんを
を恐れ観音院へ立帰り黒漢の袈裟を偸ミ隠して還さゞることを悉く
物がたり後房に入て斎飯を喫ミ再び黒風山へ赴くに其道にて
黒漢が属する小妖書牒匣を持て出来る行者みるより只一打
に打殺しかの匣を開き見れバ則ち先に頭を砕死らし観音院の
老僧を接待せる書帖なり行者読終り身を変じてかの老僧
像となり洞門に至りてかくと案内をすれバ黒漢大きにあやしミ観
音院の老僧かくばかり速にまゐるべきやうなし是ハ老猿めが化たるならく
了然ならん我是を試んと先沸衣を隠し罷請て客殿に請し
とかくの対話しける処へ巡山の小妖ひそかに馳来り大王の観音院
へ遣されし使者を孫行者が打殺し則ちの行者観音院の老僧
と像を変じ洞の中へ入りと注進に黒漢すこしも騒ず次鎗を拿て突き
かゝれバ行者も本相をあらはし鉄棒を耳の中より引出しさんざんに
戦ひけるが此時天色已に晩けれバ勝負わからざれバ戦を明日に約

妖精被殺　蒼狼露體

黒漢ハ洞裡に帰り行者ハやむことなく観音院へ帰りぬ翌早朝行者又
立出往んとするを三蔵引留て曰く你いづくへか行や行者の曰く我
此度のことをよく〳〵考へみるに都て是観音菩薩の仕業なれば
我南海に往て菩薩に此事を問んと欲すと三蔵の曰く你南海に
至りいつか爰に帰りきたるや行者の曰く我必ず斎飯の時に帰るべしと
て觔斗雲に騰がり直に紫竹林中寶蓮臺の下に至て菩薩に
むかひてやがるハ你我西へ赴く其道に禅院を作りおきて人間の香
花を受其隣に黒熊精を住しめ渠に師父の袈裟を偷ませたるハ
何故ぞや今我と同しく彼所に往て袈裟をとりて我に返しあたへよと
云菩薩の曰く你潑猴侮りを云てまされ你師父の言葉にさからひ
を袈裟を小人に借あたへ又風を呼ひ火をまして我下院を焼
ちらひ妖精に袈裟をぬすませたるハ原你がおやまりなり行者
却て我處に来りて圖頼話をなすハ何事ぞやと嘖られて行者忙
礼拝し菩薩我罪をゆるし玉へ只かの熊精袈裟をかへさゞれハ我恐る
る師父の咒をとなへ玉ハんと然菩薩慈悲をたれて袈裟をとり
返し玉ふべしとやにはぞ菩薩祥雲に乗り行者とともに黒
風山に至り玉ふ此時一個の道人ありて仙丹二粒を玻璃の盤にのせ岨を
下り来るを行者見るより走りよりて一棒に打殺す菩薩ハ向ひて
やゝ暫く此道人ハ是蒼狼の精なり今日熊精の誕生日を賀せんとて
此仙丹丸薬を持て黒風洞に至る者なり菩薩身を変して今
の道人となり盤を捧げて彼洞に至り玉へ我ハ丸薬と変して盤
中にあり熊精が呑下すを待て其腸を攪乱し而して かの袈裟

大士行者變身謀賊

と出させんに化其ゆゑしこれをうけかへし[illegible]袈裟を返し観音
大きに歓びたまひ則道人が像に変じたまへバ行者ハ一粒の仙丹
に化し盤の内にまろび居るかの盤を両手にささげ洞の内に入
給へバ黒漢忙ぎむかひまつり客殿にいざなひ座定りて後菩薩の玉
はく小道一粒の仙丹を献じて大王の寿を賀し奉るとて盤を黒
漢の前にさし出したまへバ熊精大きによろこび則丸薬をとりて口中
に入るれバ行者忽ち腹中に飛入り手足を延へて舞躍る熊精仰
天する事大かたならず命を助させいのちを免せとさけびけるに菩薩
忽ち本相を現したまひ命おしくバ袈裟を出し返すべしとの玉
へバ熊精いそぎ小妖を呼んで袈裟をとり出して菩薩の御前に
さし置けり此時行者鼻の孔より飛出袈裟をとつて走りけるを熊精
怒りて鑓をあげて突かんとす次に観音菩薩ふところより金箍一ツを
とり出して黒漢が頭に戴かせ呪を念じたまへバ熊精頭をかかへ地に
まろびあるひハ疼や頭痛や菩薩吾を助させたまへと泣叫び転びけるに
観音則かまはず為に摩頂受戒し給ひ御弟子となして南海へ引
領したまへバ行者菩薩に向ひ礼拝し袈裟をささげて観音院へかへ
りまゐり

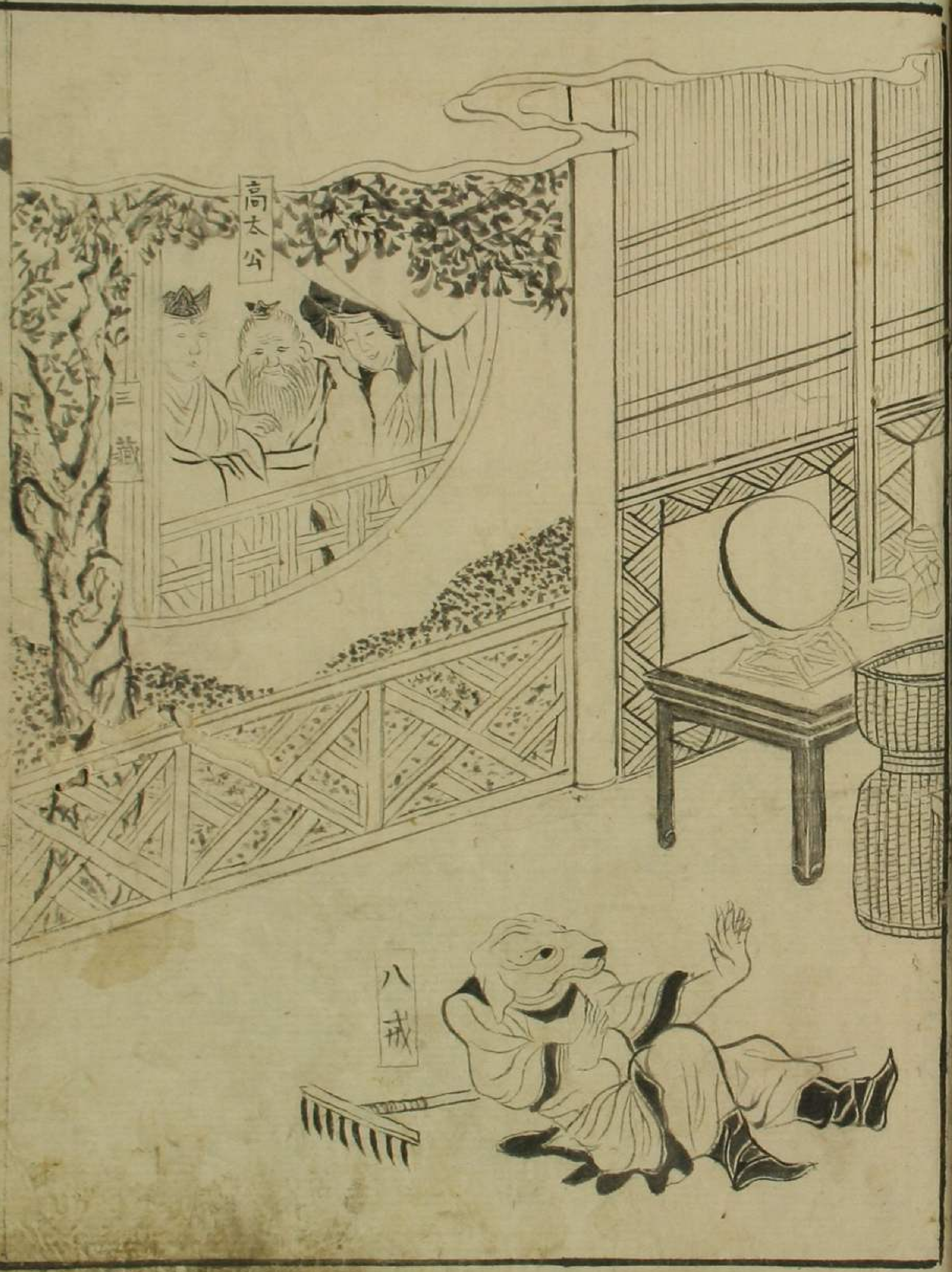
観音院唐僧脱難　高老荘行者降魔

さる程に玄奘三蔵ハなんなく袈裟を取返し衆僧にいとまを告げ
観音院を立出たまひ西に行事七日斗り[illegible]に一人の後生かいがいしく
走り行く故行者声をかけ引住め[illegible]此所ハ地名を何と

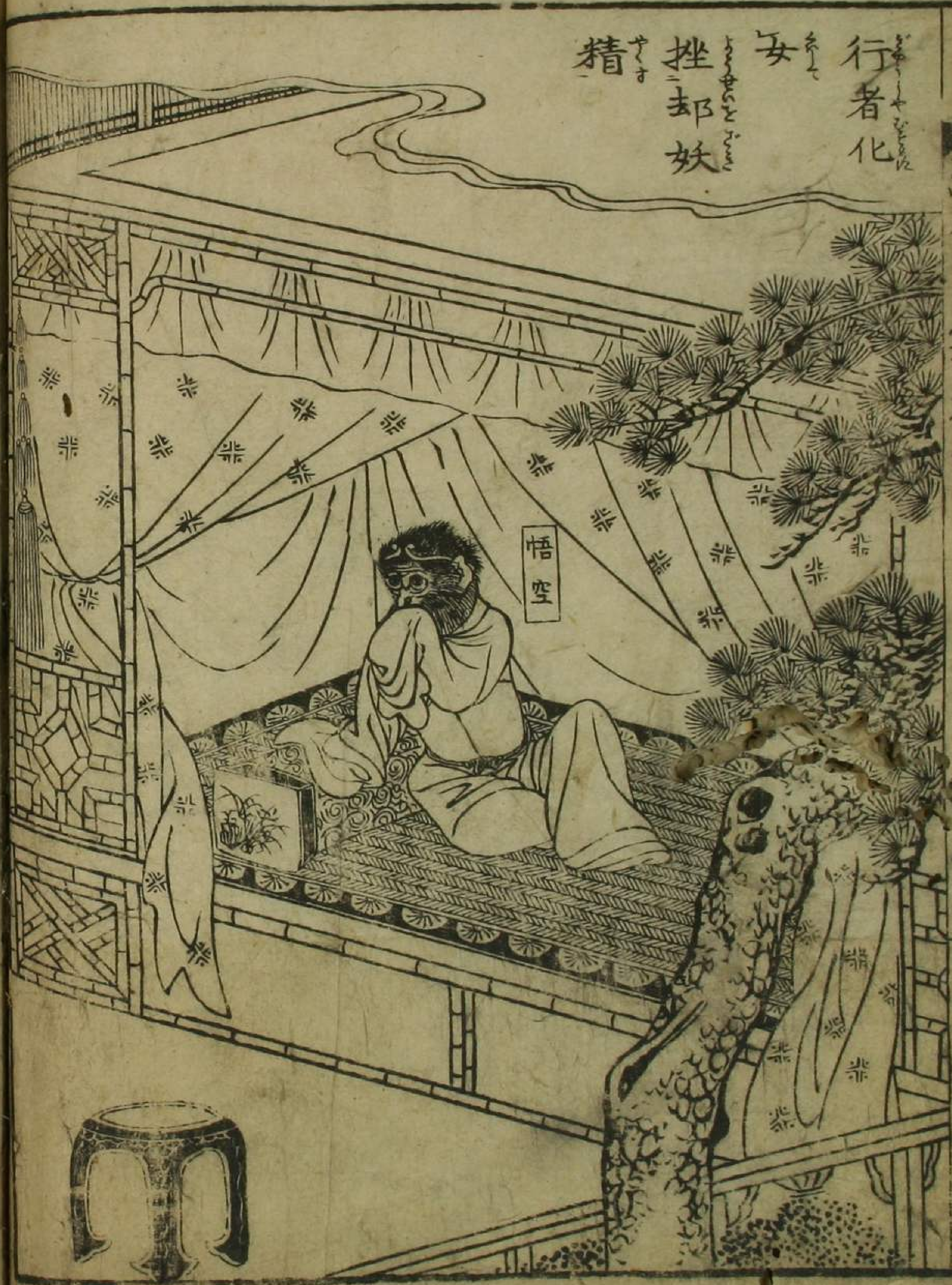
路遇二高才一
狂二駕太公一

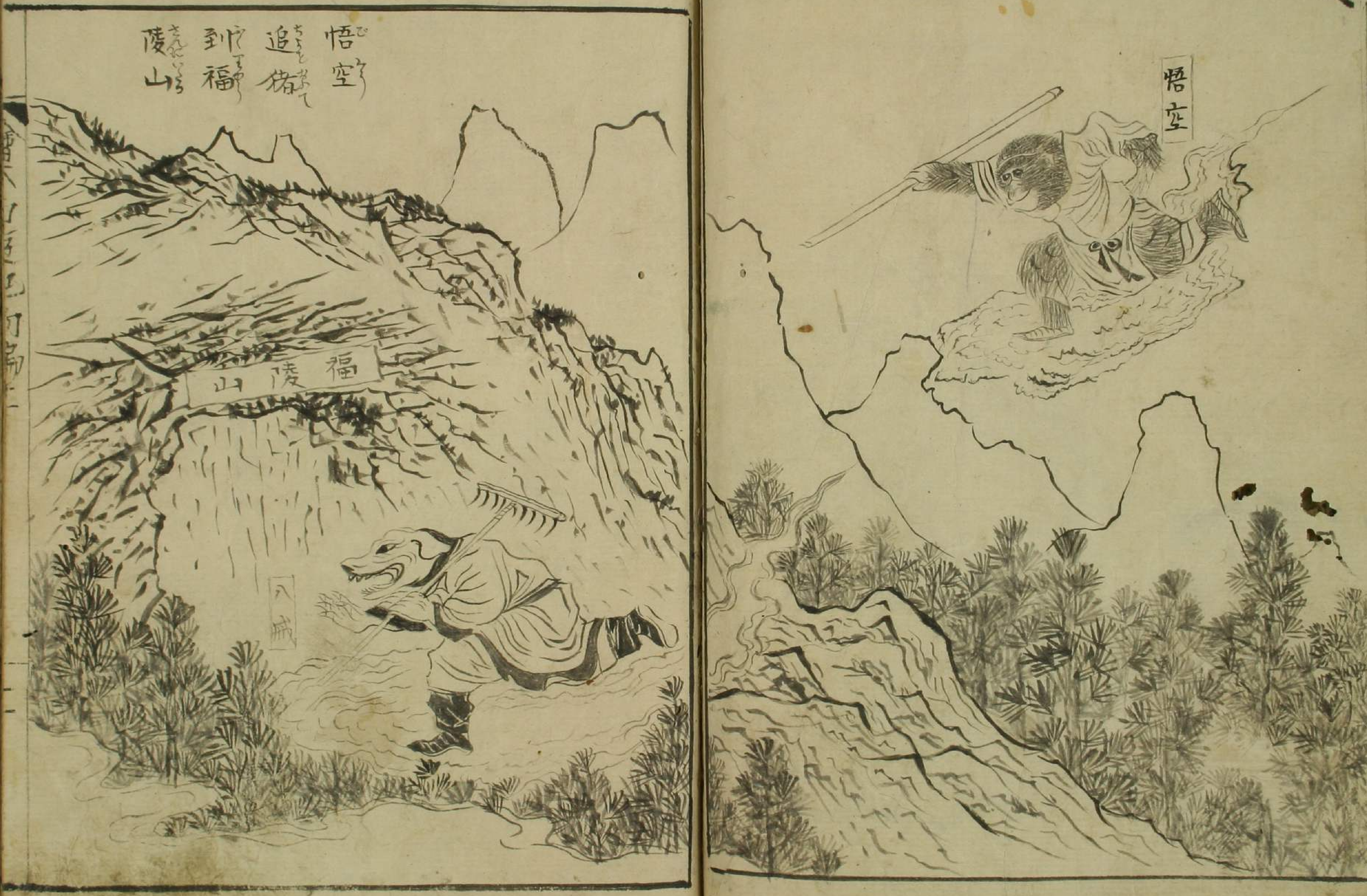
繪本西遊記初編二

暫しやかの漢答へて烏斯蔵國の地高老荘と云所なりと云捨て去りゆくを
行者又再び問て曰く你何事ありてかくはいそがはしく道を
急ぐやかの漢の曰く我ハ此所の住人高太公といふ者の家人高才な
るものなり我家主一年女に婿をとりしが此婿妖精にて後〻に
女を引入其生死を人に知らしめず是によつて今終験者を
よびきてかの婿の妖精をとらへんとて行なり行者笑て曰く你遠く行に
およばず験者を尋るにはおよばず吾ハ化物を捕る事妙を得たり我徒をつれ
なつかしやく家にゆくべし此漢行者の言を聞て半ハ信じ半ハうた
がひ遂にいざなひて家に帰る此家の主人高太公門を出て向へ来るが
行者が像のあやしげなるを見て大きに恐れ家人高才を呼て曰く
我家ならでも妖精のなやみあるにまたかゝる事おこる你其上にかゝる
雷公を伴ひ来るハ何事ぞや行者是を聞て曰く老人我を
恐れ玉ふ事なかれ我かたち醜しといへども妖精を捕る事我原来
手段あり高太公家におゐて両人を請じ入て座をさだめ来由を問けれ
ハ三蔵主公に礼を述て曰く貧僧ハ東土唐國よりはるかく西天に
至り経をもとむる者なり此家の妖精といへるハいかなる者にやと問
高太公の曰く三年以前の事なりしに一人の漢来り我女の婿た
らんと望む我其何處の人なると問ハ福陵山の産姓ハ猪とやいひ
よし我他が妖精なる事を知らずして遂に招きて婿となしけるに他
はじめに形を変じて遂に長嘴大耳なる獃子となり其食を喰ふ事
常人の三十人前に超たりされども[illegible]素斎にして葷と腥を喰
はじめハ他[illegible]葷を好まず我家産忽まちに[illegible]到るべしまてのことならば



行者化女挫却妖精




悟空追猪到福陵山
福陵山
八戒
悟空

風を起し雲にのりて往来し剰我女を後宅にひき入ふせぎ其面
たまへる事なしせめて八女の生死を定て我帝畢りてさあくと
ふぞ歎き給ふ行者是を聞て打笑ひなにごとぞ安じ給へとて
かたく次氏妖精を召へし此家を去らしむ道あらば退治ぶる
うきりなく齋飯を備えてそれてなくりうる日までにあれりれは行
者鐵棒を提後宅に入りて見れば門扉かたく閉したり行者
鐵棒を以て一打に打碎き裡に入り臥たる女に向ひ妖精いづくに
ありや女答て声を出し渠日夕に雲にのりて出行その行
衛を知ずと行者則女を引立本宅へ立かへり其身ハかの女の
かたちに變じ房に入て臥居たり暫く有て一陣の風吹来り
口長く耳大きなる妖精空中より下り直ちに房の裏に入りて

牀の上に登らんとし行者則長き嘴をとらへて突落せバ妖精
甚だ驚き今日你何故にかくハ力強きや我ゆるの遅きとうら
むるに行者の曰く我今日ころにかゝるなさる事なりかま
ゐくちのようり給へ妖精の曰く你何ぞかくのごとく我を恨るぞ
我此家の茶飯を喰へども又田畠を耕し家業の事をお
こたらず次你が衣服食用に至るまで皆我設けて事足れり其余
你が心にかゝるべきことハ何事ぞやと問ふ行者の曰く今日我父母外
面にありての事いへバ我婿ハなかなか化者にて人間のたぐひにあらじ今
修驗者をやとひ逐出すべしと云事あり我是を聞て甚だ心に
うれはしむ妖精の曰く你心を用ゆる事なかれ我元来
天罡変化の術ありて九歯の釘鈀を持たり何者をかおそるべき

悟能成誓
服従三藏
悟空
八戒
三藏
高太公

行者曰く我爹の宣ひし齊天大聖とハ通力の神をさまよ託
君さてらくゑんと云ふへり是をも恐れまハぬやとらへ其の妖精
おどろきたる氣色まてそれこそ天宮を鬧が世し弼馬溫孫悟空
なり渠をも来らハ敵しがたしとて座をさらく生んとらん此時行者
本相をあらハし我ハ則孫悟空なり妖精これを見るとひてそおそろ
き忽まち万道火光と化し福陵山をさして逃去れバ行者も又
雲に騰りのがれまじとて追て行

雲桟洞悟空收八戒
浮屠山伝受心經

孫行者ハ妖精が蹤を追ふて福陵山に至りみれバ一個の洞あり
雲桟洞の三字を门上に彫付たり洞の中より妖精九齒の釘
鈀を提おどり出て喚りて曰くそも〳〵我を誰とかおもふ其往
昔ハ天上に在て天蓬元帥の職を任ぜられしが王母瑶池の會
の時我酔に乗せて嫦娥をとらへ戯れし科により下界へ逐下され
猪て猪の胎に入り遂に此山に止り名を猪剛鬣とハいふものなり你
五百年前天上を鬧せし孫悟空なんのためにこゝへ来るや行者曰
我今邪心をあらため東土三藏法師を守護し西天に往て佛を
拜し經を需んとハ你高老が女をとらへ悪行をなすと故に唯
一棒に打殺さんとぞやがてまつく儲眉を決せよ妖精これを聞て
忽ち釘鈀を捨てやがて我向に観音菩薩の勧によりて八戒持齋
し經を取人をまつこと西天に往て佛をおがせんと此所に待て既に
久し我いくハ吾我にハ三藏法師にあわせくれよ行者が曰く你つ

三藏逢烏巣受心経
烏巣禅師
悟空
八戒
三藏

云所以ハ六偶ならん實に唐僧にあらずひ西天に至らんとなくば
誓ひを立て　我に見せべし　妖精其時天に向ひ合掌し南無
阿彌陀佛と言事ナ、ば忽ち天の啓を受け尻を降て万返
ならんと誓をまかせば行者遂に妖精を伴ひ三蔵の前に礼拝
師父我罪を赦し給ひ憐を垂たまへ、徒弟と返し西天へ伴し給へ
まへとて七星菩薩の教誨しまひし事を委細にかたりければ三蔵
大きに悦びたまひ遂に師弟の約を定め且其名を問たまへバ妖精答
て菩薩我に法名を賜り猪悟能と申す三蔵曰く此名你が法兄
孫悟空と同流なり我又你に別名をあたへんとて八戒と号
玉へり高老ハ始終をきゝて大きによろこび青錦の袈裟および鞋
一足を八戒にあたへ又二百両の銀を三蔵に献呈を[illegible]

これを受たまはず唯暇を告て立出たまへバ八戒ハ行李をせおひ
行者ハ鉄棒をふりかざし三蔵を供奉し西の方へいそぎける
行事一月ばかりにて浮屠山といへる高山に至り烏巣禅師に
謁し給ふ此禅師と申すハ香檜樹上に巣を作り其中に住たまふ
四方にハ麋鹿の啣ひ花を捧げ猿猴の属菓を献じ青鸞彩
鳳ひとしく啼白鶴錦鶏多く集る三蔵馬より下りて礼拝し
玉ふに禅師もすぐさま木を下りて答礼し心経一巻を三蔵に授け
魔障の難あらん時ハ此経をとなへバおのづから害を遁れべしと
ありけるに三蔵謹で此経を記憶あり謝しして西におもむき玉へ
ハ禅師も金光と化して巣の中にかくれ玉ふ

虎先鋒術
奪掠三蔵
虎先鋒
三蔵
悟空

黄風嶺唐僧有難　一半山中八戒争先

扨も三蔵師弟ハ日をかさね月を送り西方へといそぎ玉ふにはや程なく黄風嶺といへる山にさしかゝりけるに山の麓より猛虎一疋おどり出ければ八戒見るより打鈀をおつとり立向ひ虎の頭を一打にせんとせし所に虎ハ一個の妖精となりて怒りの声高く罵りて曰我ハ黄風大王の属下虎先鋒といへる者なり你等何者なれバて案酒となさん八戒もまた怒て曰く我徒弟をしらずや何ぞよのつねの凡夫ならん東土大唐の聖僧を供奉し西方に往て佛を拝し經を覔るものなり你道を去りてわれらを通さずんバ只一鈀に突殺に[illegible]鋒[illegible]にいり叢の中[illegible]出し

八戒と戦ふ事十余合行者これを見て妖精を打殺さんとて鉄棒をふりまはしておつかゝる虎先鋒今はかなはじとおのが身を返して逃れけるが忽金蟬脱殻の術をおこなひ身の皮を脱下し傍なる石上におき着せ虎の踞するがごとく見せ本身は風と化してかへりしが道に三蔵の座しておはしけるを一抓に提げ風の中へ立ゆる行者八戒ハ虎を追ふて山をくだりしが件の虎崖の傍に臥したりけるを得たりかしこしと棒を上てちやうと打に只虎の皮のみ石を包みたるなり行者大きに驚き此妖精金蟬脱殻の術を行ひ我徒をあざむきたりはやく立帰りて師父を守護せんとて八戒の供旧のところにたちかへりけれバ南無三宝三蔵ハさらはれ給ひぬ行者雷のごとくおめき叫び口惜きことかな師父ハさだめて妖精にとられ給ふぞいづく

孫猪両弟殺虎先鋒
悟空
八戒
虎先鋒

すみそも追行く事ならず[illegible]んやと山中とかき乱して尋ぬるところ
に山の凹なる下に大きなる洞あり門上に黄風嶺黄洞と云五字を書
たり行者鐵棒を揚て門の扇を碎るまでうちたゝき我師をとか
つせかつさむんは此洞を微塵にせんと大音に罵りければ洞の中には
黄風大王三蔵法師をとらへ今此僧原大唐にありて徳ある
僧なり是が弟子に孫悟空といふ神通廣大の者ありと聞ぬ
なり彼が尋て来るや否やと待く此法師を喰ふ臣と[illegible]
三蔵をからめ付し処に行者洞門に来りてかつせくと叫びければさ
まべてこそ孫悟空来りぬとて虎先鋒洞門をおしひらき行者に向
ふて討てかゝれば行者鐵棒をとりて車にまはしさん〲に戦ひしが
虎先鋒いかでか行者に敵すべき身をひるがへし山の小路へ[illegible]

池清

るに猪八戒爰に有て你を待事已に久しと云も終らず[illegible]釘
鈀を拿の只一突に虎先鋒を殺したり行者是をみて八戒を
称讃しふたゝび洞にいりて師父の命を救んと一手に鐵棒を
ひつさげ一手には殺したる虎を引ずり洞門さして驅行ける

池清

和漢書物 小説貸本所

小金井 前田先生編 小二郎一代記 三十 大尾

新説曉天 伊藤專三編 星五郎一代記 五十 大尾

怪談 三遊亭圓朝演述 牡丹燈籠 三十

塩原 同 多助一代記 四十 大尾

業平 同 文治一代記 全

大岡 小西屋政談 十二

近世小説 河内山實録 五十 大尾

繪本 星月夜顕晦録 三十 大尾

大郷穆編 燕山外史 二冊

一御花主様方ます〳〵御きげん能恐悦至極に存奉り候随つて弊店
年来かし本渡世仕候処文御かげを以て日にまし繁昌仕り候ま
かゝる仕合に存候扨開化の御世に相成西洋各國の書物
飜譯書絵入読本滑稽本の部ゟ貸本類品々沢山所持
仕候別ねだん下直に相働き候上ハ日間御高覧の程ひとへに相願ひ
御注文下され候ハゞ猶又御気意に隨ひ方様に御風聴偏に奉希上候

月　日

誠光堂謹白

東京京橋區弥左エ門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋 清吉